研究余滴

まだ見ぬ鈔本『論語義疏』（五）

影山輝國

前回は、明治二十年（一八八七）、足利学校に於いて書写された『論語義疏』が、北京大学図書館に現蔵されていること、また、南京図書館に『論語義疏』鈔本が所蔵されているはずであることを述べた。

今回は、その二つの話の続きを述べる。

北京大学図書館に影鈔足利学校本が登録されたのは、民国二十三年（一九三四）十一月九日であるが、この写本がいかにして北京大学図書館に入ったのかは不明である。ただそれ以前にこの影鈔本を観た人物がいることが判明した。それは大蔵書家であった傅増湘（一八七二―一九四九）である。彼はその著『藏園群書経眼録』（巻二、経部二、九三頁）の中で、

論語義疏十卷　魏何晏注　梁皇侃疏

日本写本、九行二十字。有影摹「足利学校」「轟文庫」両朱印。毎巻首下方有「睦子」二字。（徐坊遺書。癸亥）

と書き留めている。「足利学校」「轟文庫」の二つの印の模写があり、毎巻首の下方に「睦子」と足利学校第十一代庠主明哲の別号が書かれているのは、明らかに足利学校本を写したものである。癸亥というのは民国十二年（一九二三）で、この年、傅増湘は徐坊（一八六四―一九一六）が死後に残した本として閲覧したのである。足利本の写本は、一時徐坊の蔵書であったのだ。一九一一年に清朝が倒れてから、何らかの経緯で徐坊の手に渡ったものであるらしい。傅増湘がこの書を観てから、十一年後に北京大学図書館に

登録されたことになる。

さて、『蔵園群書経眼録』には、もう一つ『論語義疏』鈔本の記述がある。先に引いた足利影鈔本の直前に、

論語義疏十巻　魏何晏注　梁皇侃疏
日本室町時代写本、半葉九行、行二十字。高七寸七分、寛五寸六分。鈐有「金沢文庫」印。

とある。そもそも傅増湘は訪書の際、常に莫友芝（一八一一―一八七一）撰『郘亭知見伝本書目』携えて行き、それに自らの所見を書き加えて、『蔵園瞥録』なるものを作っていた。これをもとにして傅増湘の孫、傅熹年が整理出版したものが中華書局刊『蔵園群書経眼録』である。傅熹年は後年、別に『蔵園訂補　郘亭知見伝本書目』[二]をも中華書局から出版している。その巻三、経部八、四書類、一四一頁に、

論語義疏十巻　魏何晏等注、梁皇侃疏。
なる書名撰者名の下、根本刊本、武衛殿刊本、知不足斎刊本などについての莫友芝の記述があり、その後、

〔補〕○日本室町時代写本、九行二十字、鈐「金沢文庫」印。

という傅増湘の補記がある。これが『蔵園群書経眼録』のもとになったものであろう。本の寸法などはこちらには書かれていないが、傅増湘の別の著述、札記、手稿などから補ったものと思われる。[三]

さて、傅増湘がこの室町時代鈔本をいつ、どこで目睹したのかは明らかでない。「整理説明」によると、そもそも現存三十八冊の『蔵園瞥録』中、二十九冊は傅増湘が中国各地で目にした書物、二冊は一九二九年秋、彼が来日した時に観た書物、七冊は彼の所蔵する書物の記録なのであるが、『蔵園群書経眼録』ではそれらを書名ごとにまとめてしまっているので、中国で観たのか、日本で観たのかはっきりしないことがある。日本では宮内省図書寮、内閣文庫、岩崎氏静嘉堂、内藤氏恭仁山荘、前田氏尊経閣及び西京諸古刹所蔵の善本を記録したと「整理説明」は言う。現在所蔵が明らかな三十六本の写本中「金沢文庫」の印記があるものは一本もない。但し前田氏尊経閣にある応永三十四年鈔本（応永本）には「金沢学校」なる印記が有り、九行二十字である。この本の大きさは、縦二十二、五センチメートル、横十五センチメートルである。「高七寸七分、寛五寸六分」は、清朝の寸法ならば縦約二十四、六センチメー

トル、横十七、九センチメートルとなり、日本の寸法ならば縦約二十三、三センチメートル、横十七センチメートルであるから、いずれにしても若干の違いがある。また「金沢学校」は石川県にあったもので、「金沢文庫」ではない。したがって、この鈔本のことではないであろう。傅増湘は日本から帰国した翌年、「東西京諸家観書記」（蔵園東游別録巻第四）を、『国聞週報』第七巻第二十一期（民国十九年六月二日）から第二十五期（民国十九年六月三十日）に、毎週掲載しているが、そのうち前田侯爵尊経閣蔵書の項でも、『論語義疏』鈔本については一切何も言っていないことからもそれは裏付けられよう。

ところで「金沢文庫」といえば、近藤正斎（一七七一―一八二九）の『右文故事附録』[四]巻之四（四百四十八頁）に不思議な記述がある

論語義疏　写本　全十冊
首ニ轟文庫ノ墨印アリ睦子ノ印アリ、世ニ行ハル、義疏ノ原本ナリ

右「原本ナリ」の下に、小字双行で

宋板義疏ハ金沢文庫真本ノ下ニ出ス

とあるが、この意味が全くわからない。宋板の『論語義疏』など見たこともないし、存在すら疑わしい。かりにそれが存在したとして、それは金沢文庫の真本に拠って作られたということを言っているのであろうか。金沢文庫の真本とは、金沢文庫に所蔵されていた中国伝来の旧鈔本の意味なのか。

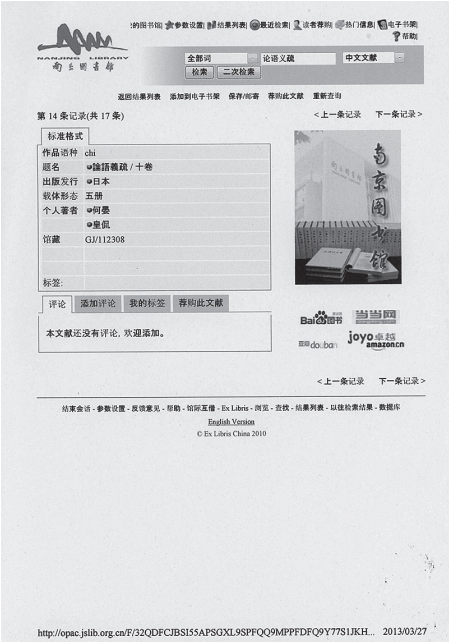
そもそも「首ニ轟文庫ノ墨印アリ睦子ノ印アリ」以下の記述は足利学校所蔵の鈔本を指しているが、「轟文庫」は朱印であって、墨印ではない。また、「睦子」は印でなく、筆写したものである。どうも正斎のここの記事は信憑性に欠ける。ただ、彼自身、室町末期の鈔本を持っていたことが『正斎書籍考』[五]巻三、経部「論語義疏」の項（三百九頁）に、以下の如く記されていることから知られる。

皇朝古鈔本数通アリ予モ室町季世ノ古本ヲ収儲ス
予室町季世伝写ノ義疏及ビ諺解ヲ儲蔵ス

金沢文庫に『論語義疏』の真本があったというのなら、重

要な指摘であるが、傅増湘が観たものは「金沢文庫」の印があっても室町時代写本であるから、正斎のいう真本ではないであろう。

次に南京図書館にあるはずの鈔本『論語義疏』について。前回述べたごとく、南京図書館には、姚文棟所蔵であった「松本本」と、丁氏八千卷楼旧蔵の「松田本」とがあるはずである。候補となるのは、二〇一三年三月二七日にウェブ上で捜したGJ112308の『論語義疏』十卷五冊である。いまその検索画像を示せば、

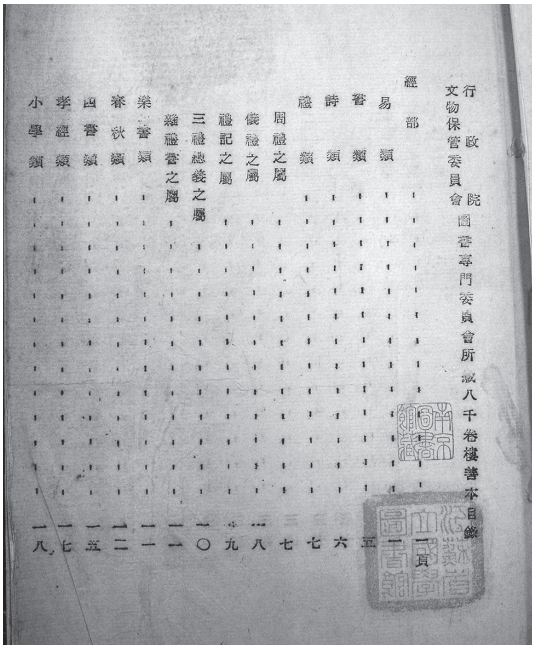


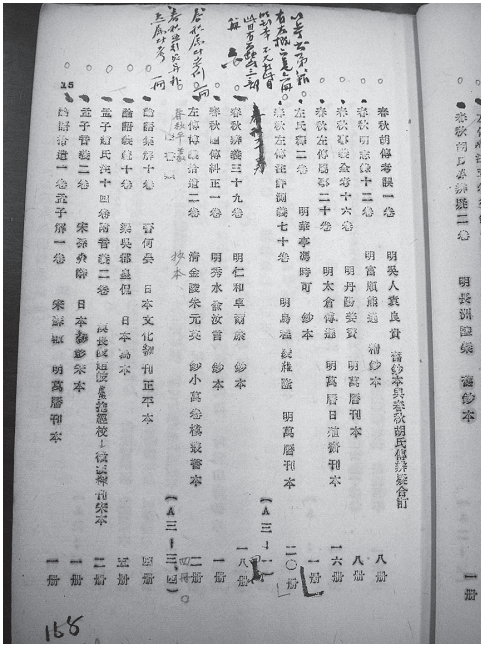
昨年（二〇一三年）九月九日、十日の両日、この本を観るために南京図書館を訪問した。南京図書館（略称「南図」）は俗に「難図」といわれるほど、本を見せてくれないことで有名なので、事前に中国の著名な学者と機関の紹介状を二通準備した。それでも出かける前から若干の不安があった。紹介状を書いてくださった先生が南京の友人を通じて南京図書館に事前に問い合わせをしてくれたのだが、その直後から、上に掲げた画像はウェブ上から削除されてしまっていたからである。

案の定、古籍閲覧室の若い出納係に目的の図書番号を告げたが、彼の机上のコンピュータ画面には何も表示されず、「こんな本はない」の一点張り。そこでこのときの為にプリントアウトしておいた検索画像と紹介状とを見せると、「事情のわかる担当者がいないから明日来い」という。翌日出直すと、中年男性が座っており、彼の話では、ウェブ上の画像は、古い図書カードから図書の存在を確認せずに作成したものであり、問い合わせがあったので確認したところ、本が見つからなかったので、ウェブ上から削除したとのこと。ではその図書カードを見せてほしいと言うと、図書館の引っ越しの際、まとめてどこかにしまってしまい、見せられないという。何を言っても取りつく島もなく、閲覧は断念せざるを得なかった。しかし、本当にこの本が存

在しないのかどうかは疑わしく、紹介状を書いてくれた中国の先生に報告すると、無いことはなかろうという顔をされ、「また、機会があれば尋ねてみてあげましょう」と言われた。いつの日かこの本が出現することがあるかも知れない。

南京図書館で一つ面白いものを見つけた。それが左の写真である。





これは、汪兆銘国民政府に隷属する行政院文物保管委員会図書専門委員会所蔵『八千卷楼善本目録』（GJ 3575539）の目次と十五ページの写真である。

論語義疏十卷　梁吳郡皇侃　日本写本　五冊

と著録されている。この委員会は一九四一年四月から一九四九年九月まで存続したから、八千卷楼の『論語義疏』（松田本）が中華人民共和国成立直前まで南京図書館にあっ

たことが再確認されよう。

（待続）

注

（一）傅増湘撰『蔵園群書経眼録』中華書局　一九八三年九月。

（二）莫友芝撰、傅増湘訂補、傅熹年整理『蔵園訂補　郘亭知見伝本書目』中華書局　二〇〇九年四月。これに先だって一九九三年六月、傅熹年は、同出版社から同一書名の手書きのものを出版している。

（三）『蔵園群書経眼録』巻頭の「蔵園群書経眼録整理説明」に「熹年謹以這三十八冊『瞥録』為主、参考其他撰述和札記手稿等、整理成此書」とある。

（四）『近藤正斎全集』第二　国書刊行会　一九〇六年三月。

（五）『近藤正斎全集』第三　国書刊行会　一九〇六年十月。

（かげやま　てるくに・実践女子大学教授）